

砺波平野 散居集落 <富山県礪波市>

緑の絨毯に基石をまき散らしたような風景



五箇山の合掌集落から富山に抜ける国道は、庄川に沿う崖地の連なる山道です。

飛騨山地を刻むように庄川は流れ、その風景は「庄川峡」とよばれます。

そして、庄川が砺波平野に躍り出た場所には、見事な扇状地が広がっています。

砺波平野
そこには、屋敷林に囲まれた一万戸あまりの農家が点在し、「散居集落」という独特な町並み景観を作りだしています。

田畑の緑が一面に広がり、濃緑の屋敷林が等間隔で点在する風景は、緑の絨毯に基石をまき散らしたようにも見えます。

散居集落は、約400年前頃から成立したとされています。

中世末の土豪による開拓から始まり、庄川の治水が進むにしたがい、江戸期を通して、砺波平野全域に広まっていったようです。



鎮守の森のような 屋敷林

砺波平野を歩くと、
屋敷林の大きさに驚かされます。

緑の絨毯に散りばめられた基石は、
一つひとつが、鎮守の森のように、大
きなものでした。



散居集落の屋敷では、広い敷地のな
かに、母屋を中心に、納屋や土蔵、灰
小屋などがあります。

砺波平野は、東からの風が少ないこと
から、母屋は東を向いて建てられたと
いいます。

そのため、
伝統的な母屋は「アズマダチ」とよば
れ、屋敷林は「カイニョ」（垣根、垣入）
とよばれました。



「カイニョ」には、主に杉が植えられ、
風雨、吹雪、暑さ寒さから家を守るだ
けでなく、燃料、建材にも利用され、
生活道具に加工されたりもしました。

屋敷のなかで、自給自足が成り立って
いたのです。



散居集落の成立理由

庄川は、岐阜県荘川村山中山(1,631m)を源として、飛騨高原の山地を深く刻んで北流し、庄川町金谷で砺波平野にでて、ここを中心に扇状地を形成しています。

散居集落はこの扇状地を中心に広がっています

庄川は、いまでは堤防により扇状地の東端を流れていますが、かつては、扇状地を乱流していたため、旧河道が幾筋も現地に残っています。

散居集落が成立し、現在まで残った理由として、以下の4つが挙げられています。

※出典:「地形図に歴史を読む」

①飛騨高原から吹き降ろすフェーン現象による火災類焼を防止するため

②庄川、小矢部川を中心とする網の目のように張り巡らされた用水路により、扇状地のどの場所でも水利の便が存在したこと

③加賀藩の土地割替制などにも拘わらず、引地などの特例が設けられたことにより、屋敷の周りに自分の耕地が存在したこと

④分家の場合、本家より50m以上離れて屋敷を立てる慣習があったため



圃場整備後も残った「カイニョ」と「アズマダチ」

昭和37年、砺波市では扇状部にあたる東野尻地区を皮切りに、大型圃場整備事業が始まります。

その後、昭和45年をピークに51年まで、散居集落地域のほぼ全域で圃場整備が行われ、散居集落の細い曲がりくねった道や水路は姿を消し、直線の車道が整備され、用排水路の分離と改修が行われました。

これにより、散居集落の景観は一変したはずですが …
どっこい、「カイニョ」や「アズマダチ」は残ったようです。



GoogleEarthの画像をよく見ると、面白いことに気がつきます。

一定間隔に配置され、一見、直線に見える車道や水路も、屋敷林を避けるように通っている箇所があることが分かります。

圃場整備においても、昔ながらの屋敷を移転することなく、田畑と農道を整備したことにより、「カイニョ」や「アズマダチ」など、散居集落特有の風景が残ることになったようです。



参考文献

「地形図に歴史を読む」藤尾謙二郎

「地形図で読む百年 中部Ⅱ」

平岡昭利・野間晴雄